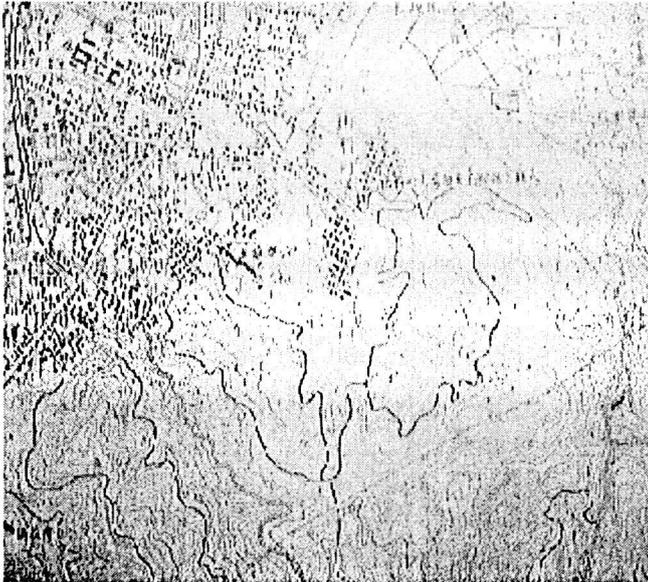


100m級低山紀行

石川県、特に金沢近郊の山と名の付く丘のようなところ
写真・文 15期奥名

◆満願寺山周辺地図



満願寺山 標高176.6m

この山は国土地理院発行1/25000「金沢」を4つ切りにしてその左下のほぼ中央に位置する。

ふもとの町窪1丁目2丁目はこの山を削り取って住宅地としたことが地図を見るとよくわかる。実際にこの地に行ってみるとなおはっきりする。道は狭く坂道の傾斜は相当なものがあり雪が積もった日にはかなり難渋しそうだ。車庫をのぞくとどこもトラックのような4WD車がおさまっている。

この山の北側には伏見川が流れており、この辺から急に平野部になるためこの上流部は川幅も狭く渓谷というイメージとなり、逆に下流部は川幅も広くひらけている。

南側にはひとつ小さな谷をはさんで高橋川が流れている。この川は伏見川とくらべると源流はここから2km程遡ったところと短く、むかしの女子高校の裏手あたりで伏見川と合体する。



中腹より



ここは満願寺山の登り口に当たる場所だがそれらしい案内はどこにも見あたらない。この石段を登っていくと途中左手にお地藏さんが一体鎮座している。この時節はかなり冷え込むので誰かがかわいそうに思ったのか立派なアルミサッシのフードに収まっている。藍色の座布団が2つ、信心のある人はここでお経でも唱えるところだが、生憎無信心なくせに臆病な私は百円玉を1枚放り込んで通過する。奥に見える建物(何というのか知らない「お堂?」)ここでも賽銭箱が待ちかまえている)を左手に飛び石をつたっていくとさらにまたひとつ建物がある(これは金堂とでも言えそうな代物である)。

寺の様子が少し違うのは墓というものがひとつもないからかもしれない。ここが神社といわれても素直にそうかと肯いてしまいそう。



金堂らしき建物の裏手には気の遠くなりそうな石段が一直線に続いている。はじめはゆるい傾斜だがすぐに急斜面となる。左手はほとんど絶壁に近くそのために最後まで手すりが設置されている。真下には住宅地がひろがって時々犬の鳴き声がここまで届いてくるのでこちら側だけはまだ町の中にいる気がする。右手は一面竹林となり、そこからさきに見えるものは低いながらも山並みだけとなる。



上りも下りも石段の数を数えようと試みたが、分からなくなって断念した。

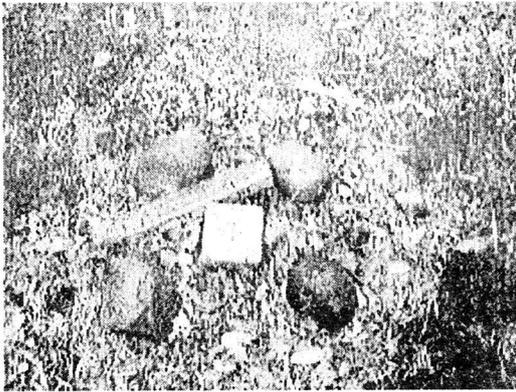
この石段はかなり上ったところで左に直角に曲がりさらに30m程進んで今度は右に直角に曲がる。最後まで石段が続き頂上にいたる。



頂上には三角点がなぜか5mほどはなれて2つある。三等三角点と記された標注は根元が朽ちて倒れている。

三角点には1等から4等まであり、3等までが地図に記載されている

1等...	970	4
0km四方		
2等...	5056	
8km		
3等...	32733	
4km		
4等...	約6万	
1.5km		



ふもとの道は山沿いに兼六園下から桜橋を渡って寺町台へあがり泉ヶ丘高校、円光寺ときてここ満願寺山のふもとを通り額、四十万、そして鶴来方面へとのびていく。この道は山間部と平野部とをわける境目を走っている。

この辺の山にはとにかく竹が多く、タケノコの季節にはタケノコが出てくる隙間もないのではないと思われるほど竹が密生している。今度はそのタケノコの季節にやっこようかと思っているが、一步山にはいると全く人気のないところで景色も好いわけではなく泥棒と見なされるのは間違いない。



100m級低山紀行

石川県、特に金沢近郊の山と名の付く丘のようなところ
写真・文 15期奥名

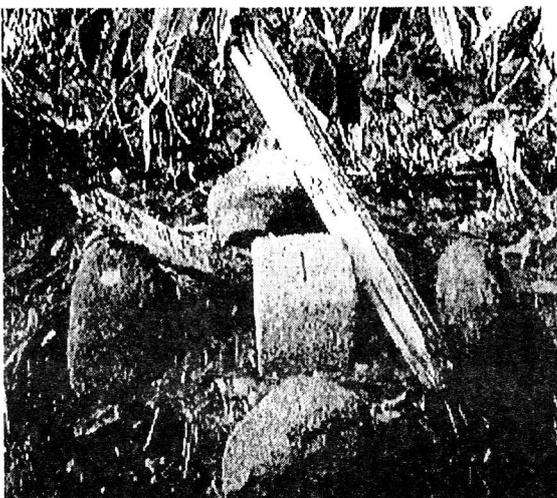
◆卯辰山周辺地図



卯辰山 標高141.2m

この山は金沢市に住んだことのある人なら誰でも知っている山である。そして我々ワングルにとっては日頃のトレーニング場所として恐れられている。しかしその山頂を極めた人は何人いることだろう。かく言う私もどこが山頂なのか今日まで知らなかった一人である。

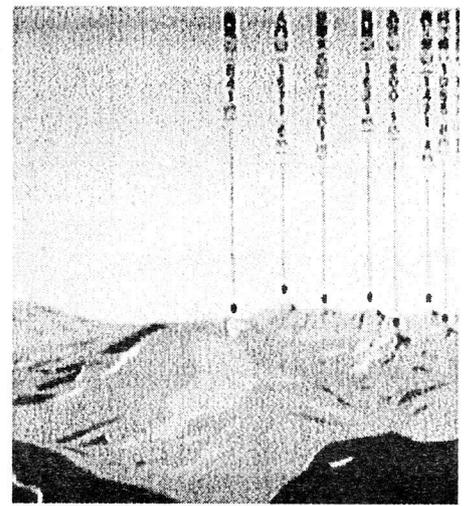
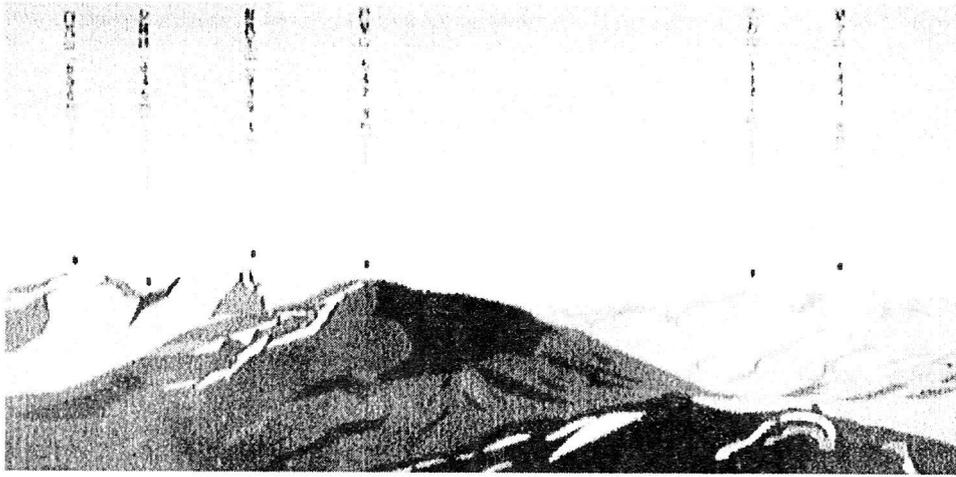
真っ先に山頂と思われる所は望湖台と呼ばれている所であろう。かつては河北潟の広々とした眺めが楽しめたのであろうが、今ではほとんどが埋め立てられてしまってとても望湖台とは言い難い。地図を見ても分かるとおりこの望湖台近辺が山頂ではない。少し北上すると横空台(おうくうだい)とよばれるところがあり、その辺に山頂があるように見える。しかし実際に行ってみるとただ広い広場があるばかりで、山頂らしきものは見あたらない。



横空台の北の端に数本の木が植えられ卯辰山公園創設記念碑が立てられている一角がある。実はこの碑の後ろに三角点がある。まわりと比べても標高が高いとは思えないが、ここが卯辰山の山頂、標高141.2mの地点らしい。

ここは2等三角点である。





今では望湖台の区画はきちんと整理されていて、一番高いところはいわゆる展望台のようになっていて、湖を望む方角だけでなく後ろを振り向くと金沢近郊の山々がはるかに望める。そしてそれらの山々の名前と標高が記された案内図(上図)がある。わかるかな――、わかんねえだろうな――。

石川の百低山 その3 春日山の巻

100m級低山紀行

石川県、特に金沢近郊の山と名の付く丘のようなところ
写真・文 15期奥名

◆春日山周辺地図

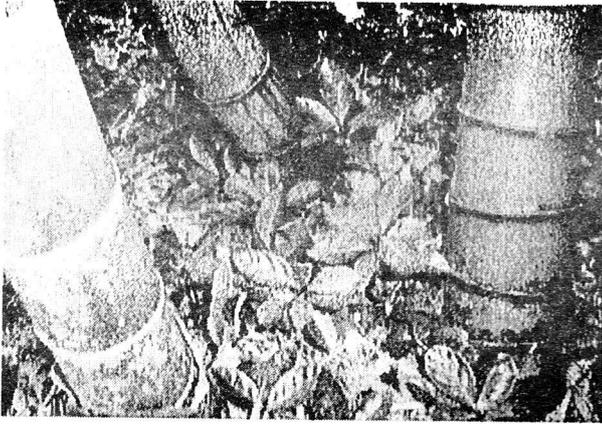


春日山 標高112m

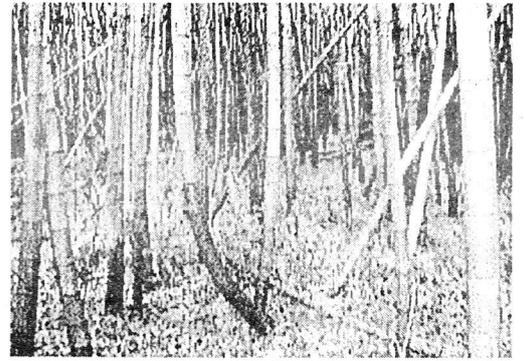
この山は卯辰山から北へ約500mのところにある。ここには三角点はなく地図上に「春日山」となっているだけである。卯辰山の頂上(前回記載)からなだらかに下りていくと見晴らしの好い墓地にでる。墓地の最北端あたりは一番細い尾根となり左手には市内の町並が、右手には東部清掃工場を真下にそしてはるかになだらかな夕日寺の丘陵を望むことができる。

墓地を抜けるとあたりは背丈以上もある細い篠竹に覆われている。そのなかに一本道が続いていく。しばらく行くと道は左右に分かれてしまい、春日山の頂上への道は見あたらない。むりやり直進しても標識らしいものもなく、あまりになだらかで頂上の位置はついに分からず仕舞となった。

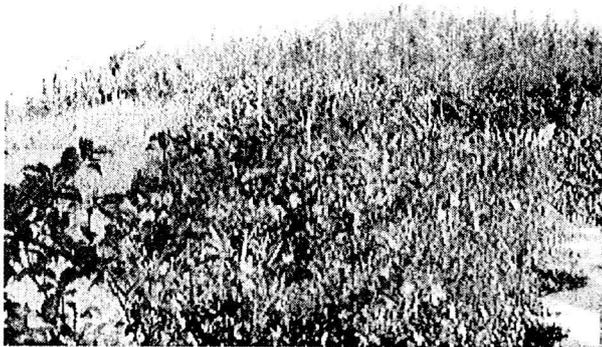
この麓には春日町という町名が残っているが、実際にこの山は鳴和町になる。



左の写真はきっとこの辺が春日山の頂上ではないかと思われる場所で、まわりは右の写真のように全く見通しが気かないほどに竹が生い茂っている。実際はこれよりはるかに暗く、よく晴れた日でもほとんど日差しは地面までは届かない。



小さな赤い花がこんな暗いところで咲いている。



墓地の東の端から春日山方面を望んで、山全体が竹に覆われている様子がよくわかるし、山の格好もしているが実際には頂上はどこだかよくわからない。

金沢市

同じ場所から金沢市街を一望できる。左端には北国新聞社のビル、中央にはかつて最も高いビルとして脚光を浴びたことのあるスカイビル(今ではこんな名前つけられない)、そして右のほうに抜きこんでいるのが日航ホテル

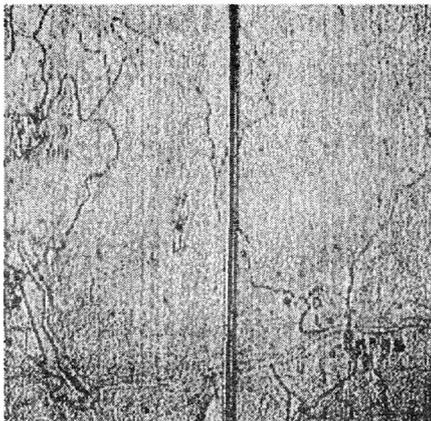


石川の百低山 その4 戸室山の巻

100m級低山紀行

石川県、特に金沢近郊の山と名の付く丘のようなところ
写真・文 15期奥名

◆戸室山周辺地図



戸室山 標高547m

この山は金沢方面から東方の医王山をながめるとその手前に屏風のように立ちはだかっている。西側は切り立った崖となっているが東側と北側はなだらかな斜面となっていて頂上付近はむしろ平坦と言っていっくらいである。

地図は「金沢」と「福光」のちょうど境付近にあたるため左の地図は中央に切れ目が入っている。

登山はかつては地図左上の戸室別所からのぼっていたが、近年ではキゴ山むかいの医王寺あるいは放牧場入り口の茶屋裏からのぼる人が多いらしい。その横にはいつの頃からかはやりとなった名水が湧き出ている。

茶屋の横からのぼり始めた。

下界は春まっただ中という雰囲気だがさすがに季節は一步遅れている。登山道は残雪に覆われていて道がはっきり分らない。分らないということはどこを歩いても良いということ!

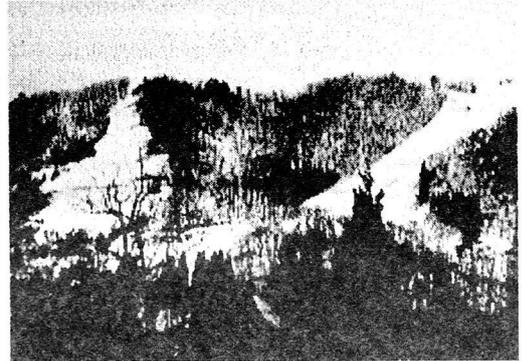




放牧場入り口付近の登り口



医王寺からは急な石段がまっすぐに続き、のぼろうとする人をくじけさせようとしているかのようだ。西側の崖とはずいぶん違ってなだらかな山容を見せている。



その医王寺の石段を少しばかり登ったところがかいのキゴ山をのぞむ。戸室山とキゴ山とは標高が同じでわずかに1m戸室山のほうが



はるかに医王の山々、手前にはキゴ山スキー場。今シーズン最後のスキー場には子供の声がかきこえてくる。スキーヤーよりもボーダーのほうが多いようだ。

石段をまっすぐ登っていく。ところどころにある踊り場にはなだれて落ちてきた雪がたまっているが実際の石段にはほとんど雪は残っていない。

石段を登りきると直角に左へまがりしばらくやや下りの水平な道となる。このへんはほとんど雪に覆われ、のぼったけいせきもないので道がよく分からない。

登山道らしい道となるとところに標識がたっている。そこからはやや急な登りとなり雪もあちこちに残っているため下りは滑りそうだ。その急な登りがおわるころなだらかな山頂にでる。積雪は50cmくらいはまだありそうで、三角点のありかもわからない。葉をおとした木々の間からきれいに晴れ渡った青空と医王の山並みがみえる。すがすがしい一時を味わった。



山頂付近から医王山方面

100m級低山紀行

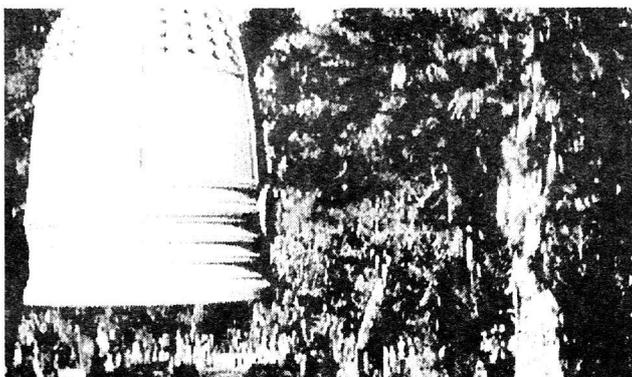
石川県、特に金沢近郊の山と名の付く丘のようなところ
写真・文 15期奥名

◆野田山



野田山 標高175.4m

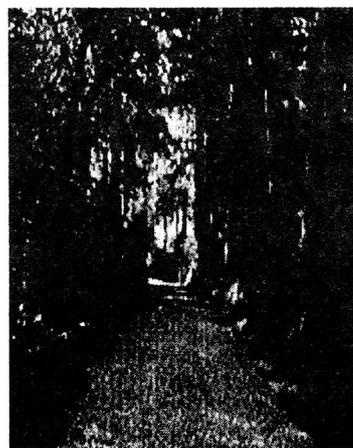
野田山は金沢市に生まれ育った人にとっては小学生のころ遠足や早起きウォーキングなどで親しまれている。また、この山の北半分は全体が墓地となっていて相当の広さがある。もともとは前田家がこの山の斜面に墓地を作ったのが始まりとされ、その後前田家の家臣も付近に作るようになったらしい。その後一般の人たちの墓地も加わっている。



野田山というほとんど墓地を指していると言っても良い。



野田山と一丁前に1/25000の地図には山として名前が載っているが、どこをどう見ても山とは名ばかりで台地あるいは丘と言った方があっている。



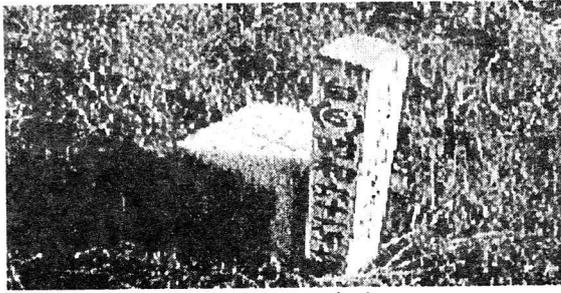
前田家墓地

長坂方面からほぼまっすぐにのぼっていく道は舗装された車道である。上り詰めたあたりの右手に実践倫理記念会館があり、市内に文化ホールや厚生年金会館などなかった頃には色々な催しやコンサートなどが行われていた。それも老朽化のためか取り壊し中であつた。ここでも一つの時代の終わりを感じさせる。



はるかに金沢市内を見下ろす

のぼり詰めから先は冬期間は通行止めとなっている。この道はほぼ真南に鶴来方面の山に向かっている。左に直角に曲がって三小牛方向に向かうならかな道を行くと、やがて「山田リンゴ園」が右手に広がってくる。その中にお椀ではなく皿を伏せたようにわずかな膨らみがありその中央が野田山の頂上である。



野田山頂上三角点

三角点がリンゴ園のなかにあり、まわりを鉄条網で囲ってある。その少し壊れかかった部分を広げて進入した。リンゴの木は葉をすべて落としていて寒々とした枝をつきだしている。

この付近では皆針葉樹ばかりで、広葉樹はこのリンゴくらいようだ。この西側一帯は杉が植林されていて、そこにはすでに赤茶けた花粉がたつぷりと用意されていた。ために小枝を揺すってみると案の定花粉がいやというほど舞い上がった。

この植林をした頃には花粉症を起こして人を苦しめることになるうとは夢にも思っていなかったに違いない。

禍福はあざなえる縄のごとし

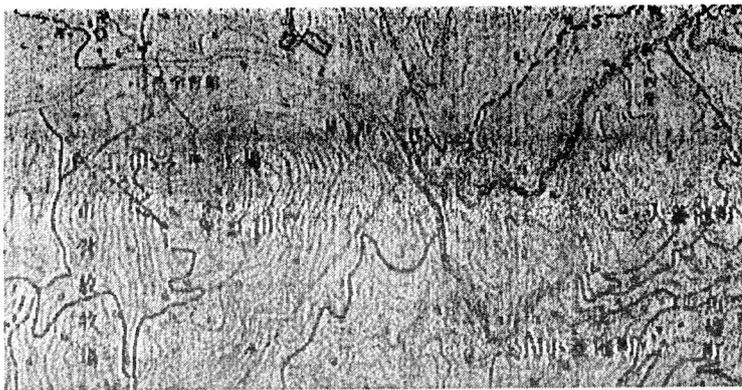


山頂付近からリンゴ園

100m級低山紀行

石川県、特に金沢近郊の山と名の付く丘のようなところ
写真・文 15期奥名

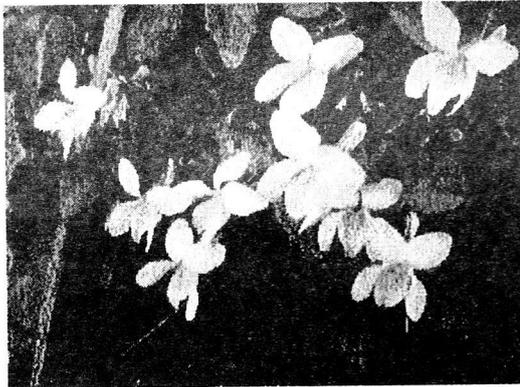
◆キゴ山



野田山 標高546m

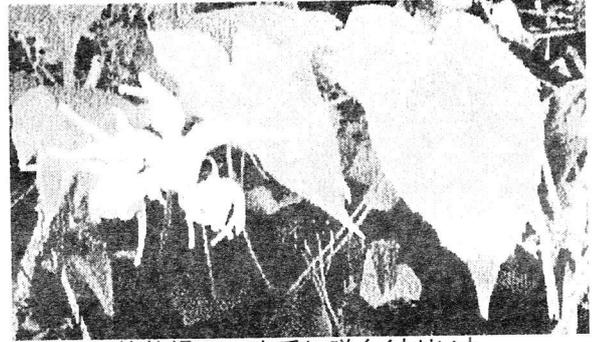
キゴ山はワンゲル育ちにとっては誰でも知っているなじみのある山である。だからといって登ったことがあるとは限らない。かく言う私もはじめて。医王山にでかけると必ず目にしてあれがキゴ山など言いながらもあまり関心の得られない山のような。向かい側の戸室山と違ってあまり目立たないが、現在では放牧場のほかに色々な施設ができ、散歩道もいくつかきれいに整備されて家族連れなどがハイキングに訪れる。

その昔文禄の朝鮮の役で捕虜になった人が故郷のケイロ山に似ていたのでケイロ山と名付けた。あるいはケイゴ山。藩政時代の絵図には「警護山」として載っている。こちらは越中の一向一揆に備えて砦を築き警護したためともいわれている。



放牧場への土手にさくスマレ

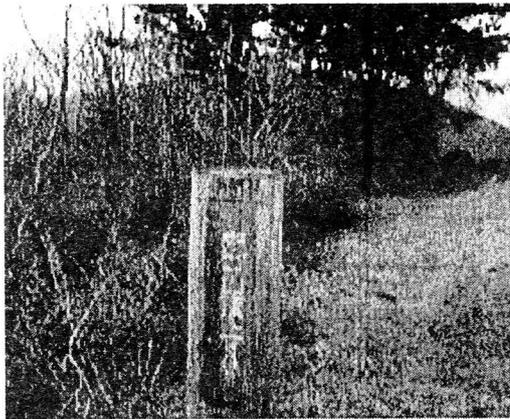
医王山に向かう車が難儀する最後の上り坂を登り切ると1軒の茶屋がある。そこから左手に登れば戸室山へ、右手に進めば放牧場へと向かう。右に曲がっていくと小さな池と四阿、それらを囲むように広場が整備されている。右手は土手が続きそこには春を感じたスマレやイカリソウが数多く咲いている。最も目立つのはなんといってもショウジョウバカマで重なり合ってきたばかりの葉もよく目立つ。



放牧場への土手に咲くイカリソウ

広場を横切るとキゴ山への登山道がいくつかあり、それぞれに名前が冠してある。

この辺でもコシアブラの新芽があちこちに見受けられる。クロモジの若葉の緑が目鮮やかだ。



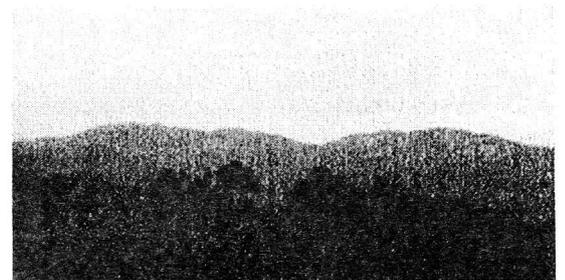
キゴ山頂上

クロモジの道と名付けるほどにクロモジの木が多い。高級楊枝に使われるだけあってその枝を折って匂いをかぐとさわやかな香気が漂ってくる。匂いもさることながらその新芽の緑の鮮やかさは何とも言えぬすばらしさだ。

頂上には少し前まであった雪もきれいに消えて夏を思わせる牧草の青々とした景色が広がって、その彼方にこちらもわずかに雪を残した医王の山が望める。

本当はと言えばカタクリをさがしにきたのだが、場所を知らずに来たことがまずかったのか全くその姿を拝むことができなかった。

それでもひっそりと咲くシュンランをいくつかみつけてプラスマイナスゼロとしておこう。

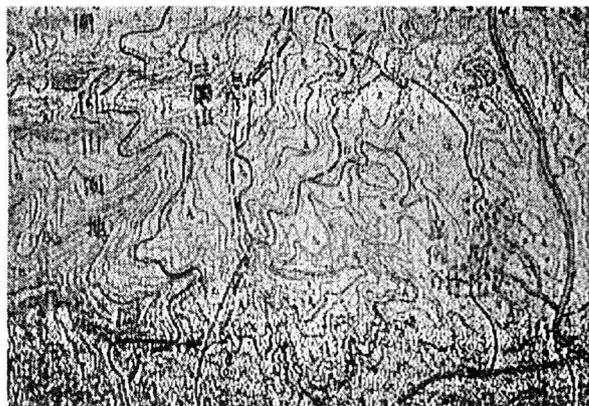


山頂付近から医王山を望む

100m級低山紀行

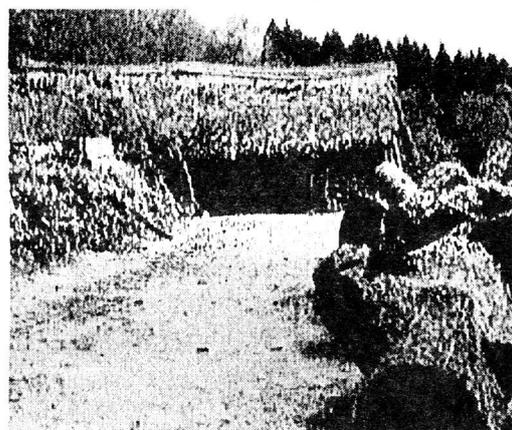
石川県、特に金沢近郊の山と名の付く丘のようなところ
写真・文 15期奥名

◆三国山



三国山 標高323m

三国山は津幡の北に位置し、標高は低いながらもその名のごとく能登、加賀、越中の三国を見渡せる山である。津幡を抜けて北へ進み能瀬でひがしの山間部へ向かう。富山県との県境に興津という部落があり、興津峠へうねうねと登る場所にへばりつくように20軒ほどの家がかたまっている。「こうづ」と呼びたくなるが「きょうづ」と呼ぶらしい。峠から尾根沿いに右へ登っていくと整備されたキャンプ場があり、そこには立派なログハウスがいくつかたっていて休日にはかなりのにぎわいを見せているようだ。三国山へはそんなところを一直線に突き抜けていく。



炭焼き小屋

林道からの登山口には大きな鳥居が建っている。登山道とは言え車でも十分通れるほどの道幅があり途中の分岐までは行ける。足下のムラサキサギゴケやカキドオシをながめつつ登っていくとすぐに右手に炭焼き小屋がある。普段はどうしているのか人影もなく中は真っ暗な中に土間があるばかりで住んでいるようにも見えないが、畑はきちんと手入れがしてある。

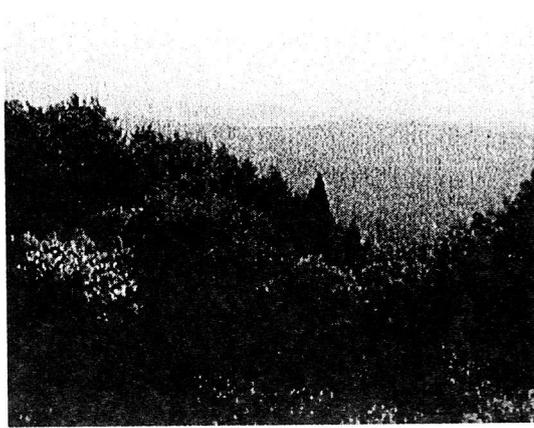
左手には竹林、右手には植林された杉林。そんな道の土手にはチゴユリがたくさんさいている。

スミレはほとんどがタチツボスミレ、分岐を過ぎてからは一面シャガの花の咲く斜面がある。



チゴユリ群生





山頂より金沢方面

山頂の少し手前の急な登りは杉と竹の林の中であって薄暗く、登り切ると様子は一変して明るく開けている。

頂上には登り口にあったものとおなじ鳥居とそして祠があり、休憩用のベンチが二つほどおいてある。ここからは四方360度みわたせ、能登の海岸線、内灘の河北潟や医科大のビル、金沢方面、越中方面は山ばかりでよくわからない。天候はカスミがかかってははっきりとは見えないが標高の割に眺望は素晴らしい。

白い花がこんもりとみえるのはオオカメノキかあるいはガマズミか

掃り道ヨメナを採取しておひたしにして食す。



山頂の祠

石川の百低山 巻8 権殿山の巻

◆権殿山



権殿山 標高224m

権殿山は森本の町中から福光へ通じる国道304号を東へ向かい、途中二俣方面へ右折し古屋谷町・直江野町を過ぎて到達する北方町の北西背後にある。地図には郵便局のマークがのっているが現在は廃屋となっているようだ。北方町(部落)にはおおよそ10軒ほどの民家しかない。その民家のなかをしばらく歩くとすぐに山道となる。山道ではあるが普通車でも通行できそうな道幅で登りの度合いもたいしたことはない。

頂上には鳥居のマークがあるので、きっとお宮さんでもあるのだろうと思っていたが、お宮さんどころか山道から頂上へ向かう道すら発見できずに終わってしまった。それらしい道を見つけはしたものの、ほとんど人が歩いたような形跡がなくやむを得ず引き返した。

里に近いにもかかわらず、訪れる人はあまりいないようで出会ったのは2台の車だけだった。

竹林の横を通った際、今朝がた顔をだしたタケノコが二つ三つみえた。

日当たりの良い斜面にはオヤマボクチが一面はえているところがあり、大きく分かれた二つの葉の間から伸び出した若い葉をいくつか採ってきた。漢字では雄山火口と書いてオヤマボクチとよぶらしい。かつては火を付ける際に起こした火を移すのに使われ、そのために火口となった。また、そばのつなぎや草餅としてうるち米にいれたりして、生活に密着したものであった。

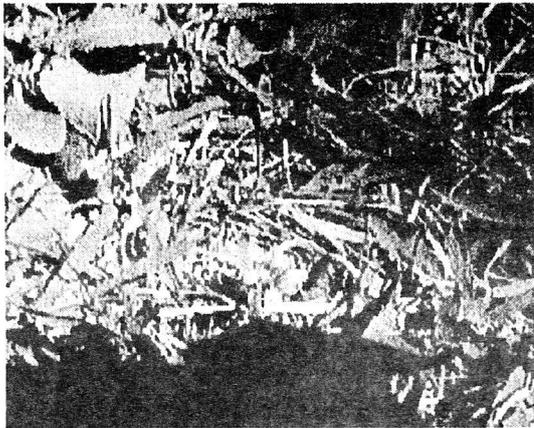


南方、医王山方面をのぞむ



オウレン

天ぷらにして食した。非常においしいものです。皆さんにもお勧めします。

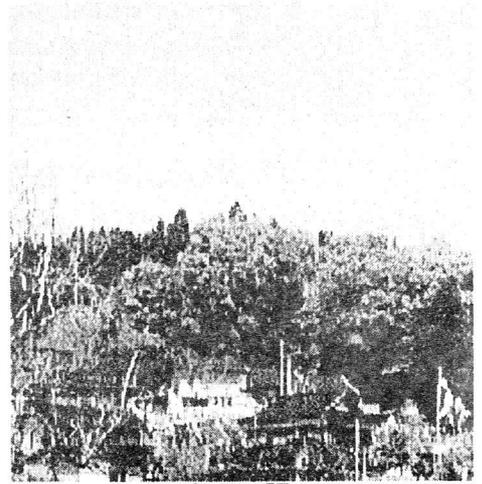


フデリンドウ

道の真ん中にフデリンドウが一ヶ所だけさいていた。地面からわずかに数センチしか背丈がなくうっかり見過ごすところだった。

北方の部落から背後をみてもなだらかな丘陵が緑に覆われているだけで山頂らしいものはみつけれず、鯉のぼりの泳ぐ町と木々の緑と快晴の空を眺めるだけで帰ってきた。

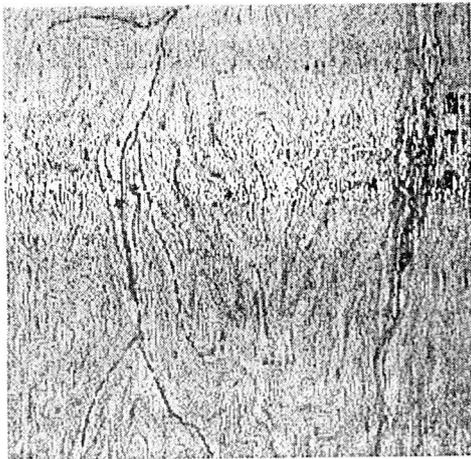
民家の近くでセリをみつけ、近くの人に断って少し頂いてきた。



山頂の祠

石川の百低山 巻9 寺尾観音山の巻

◆寺尾観音山



寺尾観音山 標高228m

加賀市役所から南へ約2km三谷温泉のある三谷川の支流に当たる曾宇川に沿って縦長の集落がある。さらに南へ舗装された林道を進むと20台ほどとめられる駐車場がある。ここから道は3つにわかれ、まっすぐ林道を進むとどこへ出るのか分からない。左へは沢沿いの道でそのまま沢をつめていくと頂上につながっているようだ。真ん中の急な登り道が一般の登山道となる。

登り口付近には薄紫のミヤマヨメナがまばらながらもあちこちに咲いている。左側の沢筋にはカタハが立派に育っていて商品になりそうだ。

養老11年(717年)二人の僧が観世音菩薩を1体ずつ持ち込み、土地の人とともに寺尾山を開き安置した。.....

それよりこの集落を曾宇(僧)と呼ぶようになった。とは私の勝手な想像。



山頂の三等三角点

登り口からいきなりつづら折りの急な登りが続く。道はしっかりしているが水はけの悪い赤土のためすべりやすく、日の当たらない北斜面と言うこともあり、一気に尾根筋まで登ってしまいたくなる。

そんなはやる気持ちをおさえてひよいと横に目を転じると今を盛りとヤマボウシの花がきれいに葉を並べた上につきだしている。エゴノキの花が実際に咲いているところを初めて見た。ルート状の白い花がすべて下を向いて咲いている。しかしかなり高い木なので双眼鏡でしかその様子が窺えないのは残念だ。



咲き誇るヤマボウシ



タツナミソウの群生

頂上のわずか手前に大きな観音堂があり、その近辺にはタツナミソウが一面に咲いていた。